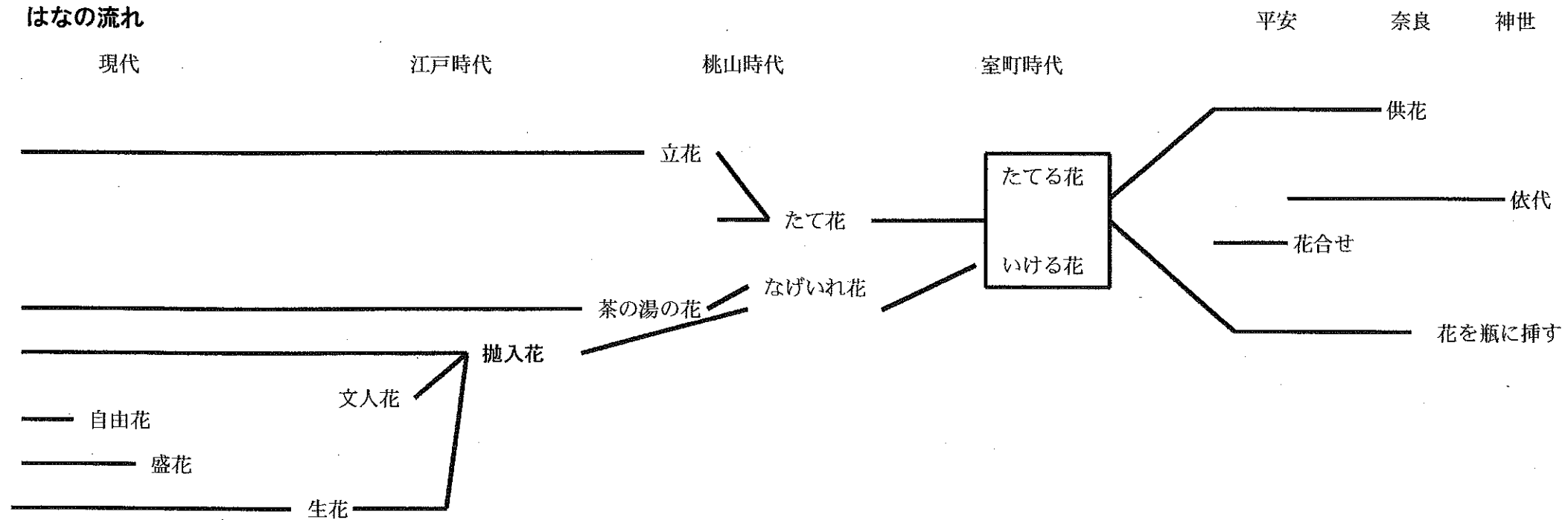


はなの流れ



- たて花
- 立花
- なげいれ花
- 茶の湯の花
- 抛入花
- 文人花
- 自由花
- 盛花

生花 「いけはな」、池坊では立花を略した小花という意味で「しょうか」とよぶ。またさまざまな流儀を生み出して「流儀花」ともいう。元禄（げんろく）期（1688～1704）を前後として江戸庶民の生活の向上に伴い、いけ花が遊芸として普及し、茶の湯の簡素な投入花が独立し江戸の抛入花（なげいればな）として流行をみ、やがて床飾りの花としての形式を整えるようになって生花となった。立花より簡略で、しかも一定の法則に基づくので格調をもって仕上がり、また水際を細くすっきりみせる姿が江戸の粋（いき）の美意識にも通うところから、18世紀中ごろから流行し、様々な流派を出現させた。生花は、儒教思想を取り込んだ天地人三才格の花型を重視した。

今日、「華道」といえば江戸時代後期、文化文政の時代に流行した生花、挿花のことを指すことが多い。